

演題名「私頑張ってもう十分生きた！」～透析歴 44 年 A さんの人生の終わり方～

演者 土屋真奈美 所属 医療法人宝池会 吉川内科医院 透析室

『背景』本邦の透析患者の高齢化が進む中、2015 年日本透析医学会統計調査によると、40 年以上の長期透析患者数は 617 名（全体の 0.2%）である。50 歳台前後で透析導入となり 80 歳台になり老化に加え様々な合併症を持ちながら透析を受ける高齢患者にとって人生の最期をその人らしく迎えられることは意味深い。今回我々は 45 歳で透析導入となり透析歴 44 年目に亡くなった A 氏を経験した。

『目的』A 氏を通して長期高齢透析患者への透析医療スタッフとしての関わりを考える。

『症例紹介と経過』A 氏 88 歳女性。慢性糸球体腎炎で 45 歳に透析導入。2013 年当院に転院。ADL はほぼベッド上だが座位保持可能で車椅子使用し通院。排泄はオムツ着用で食事・入浴は全介助、認知力低下なし。昨年急性胆嚢炎発症後より透析中断や延命治療の拒否言動あり。徐々に自宅で夜間せん妄や透析中の失見当識、食事摂取量の低下著明となり、本人から透析時間の短縮と延命治療拒否や透析中断の申し出あり。そのため A 氏・長男、透析医療スタッフ、MSW、ケアマネージャ、訪問看護師参加による話し合いを実施。訪問診療を導入、24 時間体制で対応し、最後は看取りを行うと決定した。本人は話し合いに満足され「あー安心した。44 年頑張ってもう十分生きた！私これでいつ死んでも悔いはない。」と語った。その後、全身状態の低下で透析困難となり低血圧意識混濁により透析見合わせとなり 2 日後に家族に看取られ永眠。

『考察とまとめ』A 氏は 44 年前透析を受けることで子育てや仕事を続け、その間仕事や趣味を通して自己実現を果たして来た。透析が社会復帰の為の治療の時代を経て老齢となり延命治療的意味合いが大きくなった時、A 氏は 44 年間で振り返り自分の人生をやり遂げたと感じ、これ以上の身体的・精神的負担から解放されたいと考え、家族も本人の意思を尊重すると決めていた。しかし、現状で A 氏のように自らの終焉を決定でき、本人の意思を受容できる家族は少なく、透析医療スタッフは本人にとっては苦痛にしか思えない透析を悩みながら実施している場面も少なくない。透析導入前からの関わりとして自己決定に関し、本人・家族への情報提供が重要になると考える。維持透析に関わる我々地域の透析医療者としては、患者個々の人となりや家族の思いを知り、最大限治療に活かしつつ、QOL を維持したまま最期を迎えられる本人・家族への援助を考えて行きたい。